

アンダソンとスタインベック

——いびつな林檎から腐りかけた葡萄へ——

加藤好文

はじめに

シャーウッド・アンダソン (Sherwood Anderson, 1876-1941) はアメリカ中西部のオハイオ州の生まれで、貧しい家庭に育ったこともあって、「仕事屋」アンダソンの異名をとるほどに小さい頃よりさまざまな仕事をして家庭を助けた¹⁾。しかし、そこでさまざまな人間観察がなされたのであり、そのような生活環境は結果的に将来作家として遅まきながらスタートする修行の場となったのであろう。フォークナーは初期の評論の中で、「人間は、とうもろこしや木と同じく土から生えるものだ——私はむしろ、アンダソン氏のことを、彼の生まれたオハイオ州の活力に満ちたとうもろこし畑と考えたい²⁾」と述べて、アンダソンの土着性に注目している。

そう言えば、アンダソンと同時期、他にも中西部を舞台にして創作活動を行った作家たちがいる。例えば、ドライサーは『シスター・キャリー』(1900)で大都会シカゴに出て来た田舎娘の変貌ぶりを描き、ルイスは『本町通り』(1920)でミネソタのゴーファー・プレアリーという田舎町を改革しようと乗り込んで来る女性を描き、さらにキャザーはネブラスカ開拓に燃えるたくましい女性を描いたのであった。彼らと共に、アンダソンは19世紀から20世紀への転換期にさしかかったアメリカ社会を鋭い感性で捉えた作家であり、その作風は彼の直弟子とも言えるフォークナーやヘミングウェイは当然のことながら、

時代と場所を異にするカリフォルニア出身の作家ジョン・スタインベック (John Steinbeck, 1902-68) にも少なからず影響を与えているのである。

本論では、アンダソンの代表作『ワインズバーグ・オハイオ』 (*Winesburg, Ohio*, 1919) の形式と内容の分析を試み、その評価を基にして、最後にスタインベックへの影響についても若干考察してみたい。

1. 構成上の特徴について

この作品は、アンダソンの故郷であるオハイオ州クライドの町をモデルにしたワインズバーグという架空の田舎町やその近郊農場に住む人々のさまざまな人生模様を短編の形にまとめたものである。各短編のタイトルを一瞥するだけでも、「孤独」、「死」、「旅立ち」など、人が一生のうちに必ず遭遇する問題や、無視できないテーマが並んでいるのが分かる。そのような話題について、25の短編の中で、複数の短編に重複して登場する人物を差し引いた総勢23人に及ぶ中心人物それぞれの物語が語られるのである。

従ってまずは、この作品は短編集として、各短編がそれぞれに独立した物語として読むことができる。この場合の各物語の主な時代背景は、アメリカ社会が農業中心から産業中心へと次第に変貌していく19世紀後半、特に南北戦争以降の30年余りの期間中のいずれかの時点に設定されていると考えられる。だが鳥瞰的に眺めれば、作品全体の統一的な時間は1890年代後半の約2年間を「現在」として、一貫した物語が展開する長編小説ともみなすことができる。その場合、特に第2短編の“Hands”から最後の第25短編“Departure”までがその2年間の時間的経過に沿って配列されていると考えられ、その中で主人公それぞれの物語が現在を起点として回想形式で語られ、最終的には現在の統一的な物語に再び収斂されるのである。その舞台として全体を統一するワインズバーグは、物語を総合的に勘案すると、中西部に位置し、南北戦争以前は12~15軒ほどの家が点在する小農村に過ぎなかったものが、現在は大都市シカゴやクリーブランドとも鉄道で結ばれており、人口1,800人を擁するスモー

ルタウンに成長し活気を呈している。教会、学校、新聞社、医院、銀行、旅館、その他さまざまな商店が立ち並び、人々を物心両面から支えるコミュニティー社会が営まれているのである。(因に作品は1915年以降シカゴで執筆されたこともあり、作品中にはその当時を彷彿とさせる都会や時代への言及も散見される点も付け加えておきたい。)

アーヴィング・ハウは当時のクライドの町について次のように述べている。

The world in which Sherwood Anderson grew up was not merely western, it was a mixture of all those social atmospheres we call eastern and western, urban and rural, industrial and handicraft. The sharp memory of the frontier or the growing shadow of the city—which was more important? It is a moot question and hardly worth answering, for what was important was their convergence... Perhaps the most advantageous position for such a witness was neither the city nor the farm, but rather the small town in which people retained the essential rural qualities even as they strained for the urban successes. Such a town was Clyde, in the central north of Ohio.³⁾

アンドソンが育った当時のクライドは都市と田舎の要素を合わせ持ち、新しいものと古いものが混在しているスモールタウンであった。人々は都会的成功にあこがれながらも、本質的には田舎気質をとどめていたのである。従ってこの作品構成は、そのように複雑に絡み合ったコミュニティー社会に暮らす人々の実相を可能な限り正確に捉えて時代の変化を多面的に映し出すための巧妙な装置だと言えよう。

作品を敢えて簡潔に要約すれば、南北戦争時代から20世紀初頭までの約半世紀間を視野に入れて、アメリカの都市や田舎町がどのように変化していったかを、時折作者の解説も交えながら、地域住民の生きざまに焦点を当てて描いたものと言える。ワインズバーグという地域とその住民、そしてある一定期間

という共通ファクターでゆるやかに連結された短編連作小説なのである。マルカム・カウリーはこのような形式について、後に続く作家たちも引き合いに出しながら、次のように解説している。

In structure the book lies midway between the novel proper and the mere collection of stories. Like several famous books by more recent authors, all early readers of Anderson—like Faulkner’s *The Unvanquished* and *Go Down, Moses*, like Steinbeck’s *Tortilla Flat* and *The Pastures of Heaven*, like Caldwell’s *Georgia Boy*—it is a cycle of stories with several unifying elements, including a single background, a prevailing tone, and a central character. . . George Willard is growing up in a friendly town full of solitary persons ; the author calls them “grotesques.”⁴⁾

この解説は作品の形式と内容のエッセンスを簡潔にまとめたものと言えよう。以下では、カウリーの意見を踏まえて、このユニークな構造の内実に迫っていきたい。

II. グロテスクについて

この作品の冒頭に置かれた“The Book of the Grotesque”は、以後に続く全短編の上位に位置し、作品全体の言わばエッセンスを予示する前書きとも言えるものである。この中で、一人の初老作家は朝めざめたときに外の木立が見たくて、窓と同じ高さにベッドを高くしてもらうために、老大工を呼ぶ。南北戦争の従軍兵だった老大工は、老作家の誘導で戦争の話を始め、弟が餓死した昔話に及ぶといつものように口ひげを上下に震わせて泣く。その姿は異様で笑いを誘うものであったと作者は語る。夜、老作家はベッドに入って夢うつつの状態でさまざまな顔見知りの人の姿を思い浮かべるが、彼らはすべてグロテスク

な人物になっている。見るも哀れな姿や滑稽な様子をしたものたちの行列が通り過ぎて行く。やがて彼はベッドから這い出すと、このような人物たちを基にした一冊の本を書き上げる。それが“The Book of the Grotesque”という書物で、結局出版されることはなかったが、作者の分身たる「私」は一度その本を見て忘れ難い感銘を受けたと言う。それによって以前には理解できなかった人々や物事が理解できるようになったと言うのである。

「私」はそのエッセンスを次のように要約する。

That in the beginning when the world was young there were a great many thoughts but no such thing as a truth. Man made the truths himself and each truth was a composite of a great many vague thoughts. All about in the world were the truths and they were all beautiful. . . . There was the truth of virginity and the truth of passion, the truth of wealth and of poverty, of thrift and of profligacy, of carelessness and abandon. . . . It was the truths that made the people grotesques. The old man had quite an elaborate theory concerning the matter. It was his notion that the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a falsehood.⁵⁾

このようにいろいろな真実というものがあって、その真実が人をグロテスクにするとする。要するに、数多くの思想を合成した真実それ自体はどれも美しいものであるが、人はその一つの真実に固執するがぎり、現実の社会や時代の変化から取り残されたグロテスクな存在となり、結局真実なるものも色あせてしまうということではないだろうか。その点老作家は年齢とは異なり、ある思想や一つの真実に捕らわれてそれにこだわり続けるグロテスクな人間にならないだけの若さを内に秘めている。つまり彼の内部にある「若々しさ」がグロテス

クに陥ることから彼を救っているのである。言うなれば、先に紹介した部屋の窓は外の世界との交流手段として、またベッドは創作意欲を刺激する想念の場としてそれぞれに機能しており、その総体としての結果を作品の形で表現することで、彼は内なる「情熱」を外に向かって発散し「若さ」を維持しているのである。従って翻って言えば、グロテスク性は自己を十分に表出できない結果生み出されるとも言えよう。

しかし「私」がこうも述べていることは看過できない。

Concerning the old carpenter who fixed the bed for the writer, I only mentioned him because he, like many of what are called very common people, became the nearest thing to what is understandable and lovable of all the grotesques in the writer's book. (25)

つまり、この老大工を筆頭として、グロテスクな人々はいずれも理解でき、愛すべき存在だということであろう。結局、作者はグロテスクと称される人々かもはや理解に苦しむ、忌み嫌われる奇怪な存在ではなく、愛されるべき人間、少なくとも理解可能な人間であることを宣言しているのである。あえて言えば、作者はこの前書きにおいて、過去に拘泥し真実なるものに固執した姿は確かに現実から遊離したグロテスク性を帯びてはいるが、彼らが体現するそれぞれの真実が一瞬放つ光は実に美しいものであることを見抜いているのである。そして先走って言えば、作品全体を通して、言葉にし難いその真実の美を一枚毎の切り絵にして我々読者に提示してくれるのである。

以上のグロテスク論を別の切り口で提示したのが、第3の短編“Paper Pills”である。ここに登場するリーフィー医師は、第4短編の“Mother”に登場する病弱のせいで45歳にして生気を失ったエリザベス・ウィラードと共に、第23の短編“Death”において再度登場し、両者の内的類似性が紹介される人物である。(エリザベスをはじめ、その他多くのグロテスクな人々は、「現在」の物語の中では、実年齢よりもかなり老けた姿で登場することも、特徴の一つであ

る。)“Paper Pills”でリーフィー医師が45歳のとき、ある若い娘と交際することになった経緯について、作者は次のような事例にたとえている。

In the fall one walks in the orchards and the ground is hard with frost underfoot. The apples have been taken from the trees by the pickers. They have been put in barrels and shipped to the cities where they will be eaten in apartments that are filled with books, magazines, furniture, and people. On the trees are only a few gnarled apples that the pickers have rejected. They look like the knuckles of Doctor Reefy's hands. One nibbles at them and they are delicious. Into a little round place at the side of the apple has been gathered all of its sweetness. One runs from tree to tree over the frosted ground picking the gnarled, twisted apples and filling his pockets with them. Only the few know the sweetness of the twisted apples. (36)

秋に収穫されて都会に出荷される林檎と木に残された節くれだった林檎について述べ、そして特に後者のおいしさを知る者はほとんどいないと言う。さらにその娘が財産目当ての数多くの求愛者たちを退け、結局リーフィー医師と結婚することになった点については、“she was like one who has discovered the sweetness of the twisted apples, she could not get her mind fixed again upon the round perfect fruit that is eaten in the city apartments.” (38) と述べている。要するに、丸い整った形をした都会へ出荷されるものではなく、顧みられないまま木に残された林檎の甘さに魅せられてしまったのである。作者は、リーフィー医師がこぶだらけでいびつな形をしているが実にうまい林檎のような存在として、「商品価値」のない彼に暖かい眼差しを注いでいるのである⁹⁾

もちろんリーフィー医師と同類のエリザベスに対する作者の共感も同様である。子供の頃「冒険」にあこがれていた彼女は、ワインズバーグからもっと広い世界に出よう奨める父親の忠告に耳を貸さず、結局結婚という偽物の「冒

「脱出」の罠に陥り、父親から譲られたニュー・ウィラード旅館という殻を被せられて生涯その中に幽閉される身となったのである。結婚の罠からの脱出もかなわず、彼女の「解放」はその心を理解してくれるリーフィー医師とのカウンセリングという幻のひとつときであり、さらに自分に代わってその夢を実現してくれるであろう一人息子ジョージに託すしかない。結局、彼女自身の「解放」は皮肉にも「死ぬ」行為によってしか実現されないのである。

Ⅲ. ジョージ・ウィラードについて

次に、先述した作品の構成上の特徴及びカウリーの適切な指摘に従って、主要な短編とその登場人物についてさらに見ていきたい。まずは、第2の短編“Hands”でウィング・ビドルボーム老人の唯一の話相手として早くも登場する、ジョージ・ウィラードという10代後半の若者についてである。彼はニュー・ウィラード旅館の息子で、現在『ワインズバーグ・イーグル』新聞の記者をしている。記者としての立場上第一義的には、彼の存在意義は記事になる話題を求めて事件を取材し、人々の心や過去に探りを入れてそれを白日の下に晒すことであって、彼自身は一步後ろに下がった、言わば触媒の役目にあると言えよう。実際、25編のうち17編に実質的に登場し、グロテスクなる人々と接触し、インタビューを試みている。なるほどこの作品に登場する町の住人はいずれも何らかの理由で思い悩み、しかもその心の思いをうまく表現できない者たちばかりである。ジョージを含めて思春期の若者たちは恋人や将来のこと、また漠然と人生について悩み、大人たちは挫折してしまった若かりし頃の夢や冒険をめめめと振り返る。彼らの唯一のはげ口は、町の声を記録するジョージと話をすることによって、それぞれの苦悩や不安をさらけ出すことしかない。

それではジョージは人々の存在を浮き立たせるだけのマイナーな人物かというところ、決してそうではない。彼自身も悩み多き人物としては人後に落ちない。ただ決定的な相違点は、他の主要な登場人物たちと異なって、彼は作品中で人間的に成長していく可能性をもった人物として描かれていることである。過去

の殻に籠もって一面的な生き方しかできない運命を背負わされた人々も、自分たちのことを理解してくれそうなこの若者には人生の真実の一面を伝えようとする。そして彼も彼らから、人の外見ではなく内面を、表層的な言葉ではなく心からの苦悩の叫びを読み取ることを学ぶ。このような青春時代を通して、彼は徐々に自己の人生や将来について深く思いを致すことができるようになっていくのである。“Mother”において、彼は母エリザベスに向かって、“I don't know what I shall do. I just want to go away and look at people and think.”(48)と胸の内を述べ、あと一、二年したらこの町を出て行きたいと告白する。そしてその間に所謂グロテスクな人々との接触を通じてさまざまな人生修行を積み、最後の“Departure”で、19歳になった春、10人余りの人たちに見送られてワインズバーグから巣立って行くのである。

次に、ジョージの人生経験の一端を具体的に作品中に探してみたい。まずは先の“Hands”において、ウィング・ビドルボーム老人の“You must begin to dream. From this time on you must shut your ears to the roaring of the voices.”(30)という忠告によって、間接的ながら自分というものを大切にすることや、また彼の手の動きによって、直観的に人を愛することの大切さを教えられる。(もっとも、性的倒錯者扱いされた老人の忌まわしい過去の事件については、作者の陰の声によって読者に知らされることになるが。)また、第5の短編“The Philosopher”では、昔は牧師になる夢があったというパーシバル医師から人間の罪深さについて、第16の短編“The Strength of God”ではハートマン牧師が「のぞき見」という行為によって人間の欲望との葛藤に苛まれる姿を目の当たりにして、人間の信仰心についてそれぞれ考えさせられる。だがその一方で、第14の短編“The Thinker”では、彼が思いを寄せるヘレン・ホワイトのことや作家になる夢について友人のセス・リッチモンドに吹聴し、寡黙で孤独なセスの心を傷つけてしまう。彼の多弁癖がセスを町から追い立てることに一役買うことになったのである。彼はこの他にもさまざまな悩みを抱えた人々、真実の愛の対象が見つけれないで苦悩する孤独な人々に囲まれているのである。

ところで、第19の短編“An Awakening”と第24短編の“Sophistication”はジョージが成長する上では欠かせない物語であろう。前者において、彼は日雇い労働者たちの住む地区に入り、その裏通りを歩きながらそこで営まれる現実のさまざまな生活の匂いを嗅ぐことによって、自分が大人の世界に近づいた感触を味わっている。後者はジョージ18歳の晩秋のことで、彼は自然のあるがままの姿を見て人間が卑小な存在であり、人生には限界があることを悟り、またそのありのままの自分を理解してもらいたいと望む。つまり彼はヘレンとの相互の愛を望むのであり、同じく変化の時を迎えていた彼女も本心でそれに応えるのである。こうして双方の‘mutual respect’ (242) は大きく膨らみ、“they had for a moment taken hold of the thing that makes the mature life of men and women in the modern world possible.” (243) とあるように、成熟した大人の世界が垣間見える域にまで到達し、間もなく出発の時を迎えることになる。こうして見てくると、ジョージが作品全体を統一する現在の2年間の物語を生きる中心的な人物であることは間違いないところである。

ジョージとヘレンの関係は、第12短編“Adventure”に登場する、同じく恋人同士のアリス・ハインドマンとネッド・カリーの関係とは大きく異なるものがある。アリスは都会(シカゴ)に羽ばたいて行ったネッドといつかは結婚できるものと信じて、ワインズバーグに残って仕事をしながら結婚資金を貯めつつ、ひたすらネッドの帰りを待ち侘びる。しかし結局その夢は叶えられず、彼女は壁に向かって、自分は一人ここで生き死なねばならないのだと覚悟せざるを得ない。彼女は過去の思い出に縋りつつ、自らに被せた「待つこと」という殻を最後まで打ち破ることなく終わるしかない人物なのである。

ところで、“The Thinker”にジョージの部屋の間取りが紹介されている。

In George Willard's room, which had a window looking down into an alleyway and one that looked across railroad tracks to Biff Carter's Lunch Room facing the railroad station... (134)

ここには彼の成長を促す上で重要な働きをする「窓」、「裏通り」、「駅」というキーワードが並んでいる。窓は作品の冒頭に登場する老作家の部屋の場合と同様、外の広い世界との懸け橋である。(この他にも作品中には窓への言及が頻繁になされているが、それと対立するのが、同じく頻出するブラインドを降ろし、締め切った窓であり、さらには「壁」であろう。)彼がいつも眺める二つの窓のうち、一つは自分の人生に思いを馳せ、ワインズバーグ住民の生活を観察するだけでなく実際に足を踏み入れてもみる薄暗い裏通りに面しており、もう一つはワインズバーグと都会とを結ぶ鉄道の駅の方向に面して彼の将来の旅立ちを促すものとなっている。駅前から真っすぐ延びたメインストリートとそこから奥に入った裏通りは、人生の明と暗を表し、彼はその双方を理解することができる立場に置かれていると言えるのである。そして理解したものを記事にし、さらに小説執筆の訓練もするのである。従って老作家と同じく、ジョージは他のグロテスクな人物たちとは違って内なる情熱を外に発散して自己をコントロールできる人物なのである。

IV. ベントリー農場について

ここでは、第7から第10までの短編を取り上げてみたい。というのも、この4編はジョージ・ウィラードを中心とした形式の物語の範疇には入らず、かと言って全く別個の物語でもないユニークなものだからである。つまり“Godliness”四部作は内容の緊密な関連性といい、執筆時期及び作者の意図のずれといい⁷⁾さらにはジョージ・ウィラードの完全な不在といい、他の短編とは異なった要素がある点で興味深いものである。この四部作では主にベントリー家三代にわたる物語が北オハイオの田舎にあるベントリー農場とワインズバーグの町との間で繰り広げられている。

まずパート I (第7短編)で、南北戦争で息子たちを次々と失ったトムは未っ子のジェシィを農場に呼び戻す。ジェシィはクリーブランドの学校で長老派教会の牧師になるための勉強をしていたのだった。戦後間もない頃の農場は開拓

時代の生活様式をとどめ、苛酷な肉体労働が中心であった。しかも粗末な食事で、夜は疲れ果てて床にもぐりこむ有り様であった。その当時の様子を作者は次のように語っている。

Men labored too hard and were too tired to read. In them was no desire for words printed upon paper. As they worked in the fields, vague, half-formed thoughts took possession of them. They believed in God and in God's power to control their lives. In the little Protestant churches they gathered on Sunday to hear of God and his works. The churches were the center of the social and intellectual life of the times. The figure of God was big in the hearts of men. (71)

このような神に対する絶対的信頼のもとにジェシイは狂信的なまでに神の啓示を求めて開墾作業に打ち込むのである。しかし彼も他の若者同様、内部に巣くう得たいの知れない「飢餓感」に突き動かされているのであって、自らをコントロールできない点がグロテスク性を生む要因であろう。彼は男子の誕生を神に祈り、その子と共に神の僕として神の地上の王国建設を夢見るのである。

パートII（第8短編）では同じくジェシイの物語を中心としながら、彼の一人娘ルーズ（結局男児ではなく女の子が誕生したのだった）とさらに彼女の息子デイヴィッドも登場する。望まれなかった女の子ルーズはワインズバーグの町に出て暮らすようになる。パートIで紹介したように、苛酷な農場労働が彼女には向かなかったせいもある。ところでこのパートで作者はジェシイの重要な側面を語っている。彼は生涯二つの勢力の影響下にあったと言う。一つは先述した、神の僕としてその指導者的立場に立つ願望であるが、もう一つについては以下のように述べられている。

He had grown into maturity in America in the years after the Civil War and he, like all men of his time, had been touched by the deep influ-

ences that were at work in the country during those years when modern industrialism was being born. . . The beginning of the most materialistic age in the history of the world, when wars would be fought without patriotism, when men would forget God and only pay attention to moral standards, when the will to power would replace the will to serve and beauty would be well-nigh forgotten in the terrible headlong rush of mankind toward the acquiring of possessions, was telling its story to Jesse the man of God as it was to the men about him. The greedy thing in him wanted to make money faster than it could be made by tilling the land. (80-81)

このように南北戦争後アメリカは急速に近代産業主義、物質主義の時代を迎えて、神に対する人々の信仰心は薄れ、せいぜいが道徳基準に注意を払う程度の社会になり下がってしまった。そのような時代風潮にジェシィも一方では感染し、物質的成功を熱望したのである。神と金の追求という、一見相矛盾するものを追い求める彼の姿勢は、まさしく初期アメリカ開拓期以来のアメリカ人がもつ二面性である。人間の計り事すべてに神の関与を感得する彼は、農場の拡大と生産性の向上に両者の一体化を模索していると考えられる。その意味でも彼はアメリカ人の原型につながる人物と言えよう。

パートIII（第9短編）はジェシィの娘ルイズの物語である。ベントリー農場で孤独で淋しい少女時代を過ごした彼女は、15歳のときワインズバーグの高校を目指して、そこに住むジェシィの友人アルバート・ハーディ家に下宿する。アルバートは町の教育委員も務めており、教育熱心な人物である。ルイズに比べて自分の娘たちがあまり勉強をしないことを非難して、彼は“*There is a big change coming here in America and in learning is the only hope of the coming generations. Louise is the daughter of a rich man but she is not ashamed to study.*” (89) と述べている。1880年代と思われるアメリカ社会で、成功する上で欠かせない富と学問の重要性を説いている点は興味深い。

ここでも孤独なルイズはその壁を破ろうとして、アルバートの息子ジョンとの結婚という冒険を試みるのだが、結局彼女の“the vague and intangible hunger” (96) は、前に紹介したエリザベスの場合と同様、満たされないまま終わるしかない。ただ物語最後が、彼女自身の台詞で“Had it been a woman child there is nothing in the world I would not have done for it.” (96) と結ばれているところに、グロテスクにさせられた社会に対する彼女の復讐心が瞬間的に垣間見えるように思われる。女性にとっては生きづらい男性中心の社会であったことが偲ばれるのである。その点のヒントとなるのが、このパートの冒頭に見られる作者のコメントである。

Before such women as Louise can be understood and their lives made livable, much will have to be done. Thoughtful books will have to be written and thoughtful lives lived by people about them.

Born of a delicate and overworked mother, and an impulsive, hard, imaginative father, who did not look with favor upon her coming into the world, Louise was from childhood a neurotic, one of the race of over-sensitive women that in later days industrialism was to bring in such great numbers into the world. (87)

南北戦争後の産業主義興隆の渦中であって疎んじられてきた女性たちが神経過敏症に陥り、さらにルイズはノイローゼ状態ともなったのである。彼女たちが健康を回復し、社会において対等な一員になるためには、社会学的及び心理学的見地からの考察が必要であるし、それ以上に彼女たちを取り巻く社会全体の思いやりが不可欠だということであろう。

パートIV (第10短編) はルイズの子供デイヴィドを中心とした物語である。彼が15歳になり、一時ルイズのもとを離れて暮らしていたベントリー農場からも、またワインズバーグの町からも去って、広い世界に飛び出して行くまでの様子が語られる。(その意味で、彼はまさにジョージ・ウィラードのミニ

チュア版と言える人物である。)ここでの祖父のジェシィは、農場経営で大成功を収めると、例の二つの勢力のうちの前者、すなわち神に対する信仰心に次第に比重を置き始める。彼は聖書に倣って、子羊を神への犠牲として捧げることによって自分とデイヴィドに神のお告げをもらおうと計画する。二人が森に入り、木々に囲まれた空き地でジェシィがナイフを取り出したところで、デイヴィドは恐怖心から彼を倒して逃げ帰る。そして祖父を殺してしまったと誤解したデイヴィドは、“I have killed the man of God and now I will myself be a man and go into the world” (102) と言い残して、出奔するのである。一方、正気に返ったジェシィは相変わらず神のことを口走るのみで、デイヴィドがいなくなったのも、“a messenger from God had taken the boy” (102) と言うだけであった。ここにも彼ら二人にとって、特にジェシィにとっての一つの真実である神の信仰に固執したグロテスクな姿がある。

Henry Idema IIIはアンドソンの特徴について次のように述べている。

In Clyde, religion was nourished by agrarian life and a sense of community, both of which were withering away during Anderson's upbringing because of industrialization. And the concomitant decline of institutional religion would become a recurring theme in his writings. . . . Yet the impact of secularization on the mental health of America concerned him even more.⁸⁾

彼の作品における、信仰心の希薄化と、産業化あるいは世俗化の急速な進展の問題を指摘したもので、まさに慧眼であろう。特に、社会が俗化していくことに対する精神面への悪影響についてアンドソンが関心をもっていたことは、独立的な小説構造をもったこの四部作においてジェシィ・ベントリーを中心としたベントリー一家三代の生きざまが逆説的に物語っていることである。

V. スタインベックへの影響について

アンダソンのスタインベックへの影響についてはこれまであまり詳しくは論じられていないが、スタインベックはかなり強く影響を受けているのではないかと思われる。例えば、『ワインズバーグ・オハイオ』は学生時代、作家修行仲間の愛読書であったことを記しているし⁹⁾さらに彼が読んだ蔵書の中には *Poor White* や *The Portable Sherwood Anderson* をはじめ、その他の短編集も含まれている¹⁰⁾スタインベックは『エデンの東創作日記』の中で、「シャーウッド・アンダソンが現代の小説を作ったが、それ以後小説は彼を超えてはいない」と語り¹¹⁾さらに『アメリカとアメリカ人』では、「アメリカの過去を考えてみても『ワインズバーグ・オハイオ』を読まなかったら、我々の知識はどんなに貧弱になることだろうか」と述べて¹²⁾アンダソンを高く評価している。

批評家たちも『ワインズバーグ・オハイオ』とスタインベックの作品との類似性に関して個別的には指摘している。先述したようにカウリーは『天の牧場』(1932)と『トーティヤ・フラット』(1935)をその候補に上げ、プロム・ウェバーは『知られざる神に』(1933)を指摘し¹³⁾さらに Kriengsak Kisawadkorn は『二十日鼠と人間』(1937)と一部の短編を取り上げて論じている¹⁴⁾だがスタインベック自身の言葉や、前章までで見てきた『ワインズバーグ・オハイオ』の内容から判断すれば、さらにその関連性は広がり、例えば『怒りのぶどう』(1939)や『エデンの東』(1952)にも及んでいるように思われる。ここで詳しく論じる余裕はないが、以下で少し指摘しておきたい。

スタインベックの作品群中、形式上の共通性から言えば、『天の牧場』、『トーティヤ・フラット』、『キャナリー・ロー』(1945)の三作品が特定の地名を付されて、ある特定の人物や建物を中心に構成された20世紀前半までのカリフォルニアのコミュニティー社会が描かれている。また地名ではないが、『長い谷間』という短編集もサリーナスという特定の地域を共通の舞台としている点で先の作品に準ずるものとして差し支えないだろう。(ただし、共通する中心人物は登場しない。)リチャード・ピーターソンは『ワインズバーグ・オハイオ』と『天

の牧場』を比較して次のように述べている。

Anderson weaves the theme of human isolation from story to story in *Winesburg, Ohio*, but he also suggests the possibility of emotional growth and human understanding through George Willard. In *The Pastures of Heaven*, Steinbeck portrays individuals united by the need for some dream or illusion to give their life purpose, but the Munroes, with their middle-class virtues and realities, constantly appear to destroy their hope.¹⁵⁾

両作品のポイントを的確に指摘している。さらに言えば、ジョージは成長しこの地域からより広い世界に出て行く人物であるのに対して、マンロー一家はサンフランシスコでさまざまな失敗に遭い、この地に逃避してきた人物たちなのである。

また内容の面から類似性を考えるならば、グロテスクの問題は避けては通れないであろう。スタインベックは一度もこの言葉を使ってはいないが、アンダソンの作品の中で見たグロテスク性からすると、多くの作中人物たちがこれに該当しそうである。スタインベック作品に登場する中心人物たちがグロテスク性を帯びるのは、特に彼らが土地に執着することからである。20世紀においてはいくぶん色あせた土地神話にアナクロニスティックにこだわり続ける人物は、例えば『知られざる神に』のジョゼフ・ウェインであり、『二十日鼠と人間』のレニーであり、また『怒りのぶどう』のミューリー・グレイブズやジョード一家、さらには『エデンの東』のアダム・トラスクなどである。これらの作品ではその上に宗教的色彩が加味されて彼らの異様さを際立たせている。『エデンの東』は生と死をめぐって展開される人間の罪に焦点が当てられているし、『知られざる神に』でジョゼフは、夕日に向かって神に感謝の捧げ物をする老人に感化されて自己の死を受容するし、『二十日鼠と人間』でレニーは死の直前、相棒のジョージから神の恩寵とも言えるような至福のときを授けられる。また『怒

りのぶどう』では葡萄の実の成熟に合わせて、グロテスクな人々の不満が次第に膨らんでいき、それがさらに人々の一致団結した怒りの行動へと熟成する。そして収穫の時を迎えても放置されたまま腐って落ちていく葡萄からついに神の怒りが発酵するのである。

『怒りのぶどう』では、機械化による大規模農業と農業技術の革新による生産過剰が貧しい人々の夢を打ち砕き、生活そのものを破壊してしまう問題も取り上げられている。作者は次のように言葉を挟む。

Men who have created new fruits in the world cannot creat a system whereby their fruits may be eaten. And the failure hangs over the State like a great sorrow.... There is a crime here that goes beyond denunciation. There is a sorrow here that weeping cannot symbolize. There is a failure here that topples all our success. The fertile earth, the straight tree rows, the sturdy trunks, and the ripe fruit. And children dying of pellagra must die because a profit cannot be taken from an orange. And coroners must fill in the certificates—died of malnutrition—because the food must rot, must be forced to rot.¹⁶⁾

果物が豊かに実っているのにそれを人々は口にすることができない。利益をあげるためには、かたや栄養失調で人が死のうとも、果物は腐らせ焼き捨てねばならない。これはアメリカの制度の不備であり、あらゆる成功を覆す失敗であると断じている。そしてついに作者は、“In the souls of the people the grapes of wrath are filling and growing heavy, growing heavy for the vintage.”¹⁷⁾と、神の怒り (wrath) が下るのを予言するのである。

このようにスタインベックは多くの作品の中でアンダソンのグロテスク性に合致するような人物を登場させていることが解る。特に、土地に執着した人物の描写が目立つのであり、しかも彼らの側に力点を置いた描写の中に作者の暖かい眼差しが感じられる。その上で時代に合わせた彼独自のテーマを設定し、

それを文学性豊かに描出しているのである。

お わ り に

以上、アンドソンの『ワインズバーグ・オハイオ』の形式と内容を分析してみた。最初にこの作品が短編小説と長編小説の構造を併せ持つことを確認し、それが人物をさまざまな角度から眺め、時間の流れを複雑にする効果を生み出していることを指摘した。次に作品全体に流れている思想的バックボーンとしてのグロテスク性について考察し、さらに作者が、時代の流れに翻弄され、グロテスクになった人々に理解を示し、共感していることを指摘してみた。その上で、ジョージ・ウィラード少年が一人の作中人物として物語に登場しつつ、グロテスクな人々の生の声を聞き取り、彼らを理解できる唯一の人物として作品全体を統括する役目にあることを探ってみた。そのような構造の中であって、次に検討したベントリ一家三代の物語が、さらに緊密なつながりを持ち、あたかも入子細工のように全体の物語の内部に組み込まれている様子を考察してみた。以上を踏まえて、最後にそのようなアンドソンの特徴が後のスタインベックの作品にも影響を与えていることを概観した。形式の面においてもさることながら、特にグロテスク性に共通点があることを指摘した。

Kisawadkorn は、モダニストの作家たちの姿勢を次のように指摘している。

When readers are encouraged by the author to show sympathy for the grotesque creation, their attitude towards it also changes—they now understand its condition, its plight, and its naturalness. Therefore, they share the authorial care and compassion—the essentials of American modernist writers' attitudes towards the grotesque. The grotesque, which, previously, was something to hate, fear or despise, begins to be viewed as something to love, trust or respect.¹⁸⁾

まさに正鵠を射ていると言えよう。本論に則して言えば、アンダソンとスタインベックは所謂グロテスクなる人々を愛し、信頼し、敬意を払う姿勢を見せている。過去を現在にまで引きずっている人々、そして自分の考えていることをうまく表現できない人々、そういう人々が内包している真実の姿をアンダソンもスタインベックも洞察し、それに恐怖や皮肉の衣装をまとわせて作品化したのである。しかしその根底には、常にこのような人々に対する深い理解があることを見逃すことはできない。最終的には、アンダソンの「いびつな林檎たちはジョージ・ウィラードの将来に自らの身を託し、スタインベックの「腐りかけた葡萄」は神の怒りに身を委ねるしかないのだが、そこに至る彼らの必死に訴えかける姿が美しいのである。

注

- 1) Irving Howe, *Sherwood Anderson* (California: Stanford University Press, 1966), p. 16.
- 2) 福田陸太郎他訳『フォークナー全集1』(東京: 富山房, 1990), p. 445.
- 3) Irving Howe, *Sherwood Anderson*, pp. 5-6.
- 4) Malcolm Cowley, "Introduction" in *Winesburg, Ohio* (New York: Viking Press, 1960), p. 14.
- 5) Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio* (New York: Viking Press, 1960), pp. 24-25.
以後、この作品からの引用は引用文に続けて、括弧内に頁数のみを示す。
- 6) 福田陸太郎他訳『フォークナー全集1』, pp. 445-446. この中でフォークナーは「私が『ワインズバーグ』に見出す作家の個性の唯一のしるしは、これらの人物に対する思いやり、もしこの本が普通の長さの長編小説として書かれていたなら、甘くて鼻もちならないものになったに違いない思いやりである。」と述べている。
- 7) ブロム・ウェバー著「シャーウッド・アンダソン」(ミネソタ大学編『アメリカ文学作家シリーズ』第九巻所蔵)(東京: 北星堂書店, 昭和43年), p. 83. この中でウェバーは、『ワインズバーグ・オハイオ』の大部分は明らかに全体を一つにまとめる計画に従って、1915年

- の晩秋から翌年 16 年の半ば以前に仕上げられたが、一つの例外は“Godliness”四部作で、これはアンドソンが 1917 年に書いた未完の小説に手を入れたものと指摘している。
- 8) Henry Idema III, *Freud, Religion, and the Roaring Twenties ; A Psychoanalytic Theory of Secularization in Three Novelists : Anderson, Hemingway, and Fitzgerald* (Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 1990), p. 76.
 - 9) Jay Parini, *John Steinbeck : A Biography* (London : Heinemann, 1994), p. 50.
 - 10) Robert J. DeMott, *Steinbeck's Reading : A Catalogue of Books Owned and Borrowed* (New York : Garland Publishing, Inc., 1984), pp. 6-7.
 - 11) John Steinbeck, *Journal of a Novel : The “East of Eden” Letters* (New York : Viking Press, 1969), p. 124.
 - 12) John Steinbeck, *America and Americans*, in *The Complete Works of John Steinbeck, Vol. XVI*, ed. by Yasuo Hashiguchi (Kyoto : Rinsen Book Co., 1985), p. 135.
 - 13) プロム・ウェバー著「シャーウッド・アンドソン」, p. 88.
 - 14) Kriengsak Kisawadkorn, *American Grotesque from Nineteenth Century to Modernism : The Latter's Acceptance of the Exceptional* (Ann Arbor : University Microfilms International, 1997), pp. 162-169.
 - 15) Richard Peterson, “The Turning Point : *The Pastures of Heaven*,” in *A Study Guide to Steinbeck : A Handbook to his Major Works*, ed. by Tetsumaro Hayashi (Metuchen, N. J. : The Scarecrow Press, Inc., 1974), p. 89.
 - 16) John Steinbeck, *The Grapes of Wrath* (New York : Viking Press, 1978), pp. 476-477.
 - 17) *Ibid.*, p. 477.
 - 18) Kriengsak Kisawadkorn, *American Grotesque from Nineteenth Century to Modernism*, pp. 168-169.